

マリー・ド・フランスの『エリデュック』における「海難」について

三木賀雄

はじめに

海が中世の人々に対してどのように意味付けられていたかを知ることは、限られた時代の精神風土の一端をさぐるというばかりではなく、人間と海との根源的なかわりを解き明かす上でも、きわめて重要な課題といえるのではないだろうか。

この意味からすれば、中世、とりわけ海への関心が高まりを見せた 12 世紀の北西ヨーロッパ海域、いわゆるポナンと呼ばれる海域の海事情は興味をそそる。人びとは、全長わずか 25 メートル程度、波の打ち込みを防ぐ水密甲板も持たず、風上に向かうための有効な帆装も持たない危うげな船に乗り込み、非効率きわまる櫂櫓を巧みに操りながら、たえず激しい潮流と強風に見舞われるこの海上を往来していたのだ。時として、水夫たちの知恵と技量が自然の力と調和する、至福の瞬間があったかもしれない。しかし場合によってはその猛威の前に屈服し、死の恐怖をひたすら耐え忍ぶ不幸な瞬間もあったに違いない。航海装置が脆弱であったが故にますます、海と人間とがきびしく対峙する基本的な構図がそこには見てとれるのである。

不運にも嵐に遭遇し、舷側をこえた海水に足元を洗われ、その冷たさに遭難を確信するとき、沈みゆく者が抱く恐怖はいかばかりであったらうか。海の荒々しい所業を目の当たりにして、彼らが抱いた感懐はどのようなものであったのだろうか。

実際、12世紀の物語作者たちは、しばしばこのような海難の逸話を取り上げてきた。彼らはこのモチーフをさまざまな意匠のもとに使い分けたのである。元来が千変万化を表象する海に、船の命運をゆだねさえすれば、乗り組む者をどのように数奇な運命にも、どのような意想外の世界にも、たちどころに導き入れることができる。それに、荒れ狂う海に翻弄され、狂乱状態におちいった船上においては、いかなる心情の表明も過激な行動も不自然ではない。海難のモチーフは作者たちに、現実世界の諸制約を逸脱して物語を構成しうる、いわば治外法権的空間を与えていたともいえるだろう。

たとえば、マリー・ド・フランスの短詩『エリデュック』には、そのような考え方をうかがわせる実例が、きわめて簡潔な筆致で描き出されている。この小論では、『エリデュック』において、マリーが海難というモチーフをどのように取り扱い、どのような独自性を織り込んでいるのかについて、若干の考察をおこないたい。

* * *

はじめに物語前半のあらすじを簡単に追っておこう。

勇猛果敢なエリデュックはブルターニュ王の覚えめでたい騎士であったが、その寵愛が仇となって人の讒訴をまねき、国外追放を命じられる。彼は糊口をしのぐべく、家柄もよく、気だても優しい妻ギルデリュエックを残してイングランドに渡り、エクスターのとある領主に傭兵として仕えた。この領主は近隣の領主に攻められて、籠城を余儀なくされていたのだ。しかしエリデュックの見事な活躍が領主の苦境を救う。やがてこの国の王女ギリアドンが彼に心を寄せる。エリデュックは妻を持つ身であったが、ギリアドンの愛を拒むことができず、苦悩の末に彼女の愛を受け入れてしまった。とこ

ろが、ブルターニュ王から、エリデュックに手助けを要請する便りが届く。思い迷った末に、ギリアドンに必ず迎えにくると約束して、彼はイングランドを後にした。ブルターニュに帰還したエリデュックは華々しい勲功をかさね、王と故国を苦境から救う。しかし王女ギリアドンへの想いはつのるばかり。ついに彼は妻に対して、ブルターニュでの紛争に決着がつき次第、イングランドの領主のもとに帰らねばならないと嘘をつき、再びイングランドへ出発した。供連れは二人の甥と侍従、そして従者たちだけ、ひそかに海をわたって、王女ギリアドンを連れ帰る算段であった。首尾よくギリアドンを連れ出した一行は、好天とよい風に恵まれて帰国の途につく。しかしブルターニュを目前にして、彼らの船は突然の嵐に行く手をはばまれ、難破寸前にまで追い込まれる。帆桁は壊れ、帆は裂けて、もはやこれまでというとき、船頭はエリデュックとギリアドンの不義をあばきたて、ギリアドンこそが彼らの苦境の元凶であると難じて、神の怒りをなだめるために、彼女を海中に投げ入れさせてほしいとエリデュックに迫った。

ギリアドンを海中に投ぜよという船頭の主張の根底には、海を神による罪障審判の場と見なす古くからの信仰が横たわっている。キリスト教信徒に対する教導を目的とした聖人伝説や説話の中で、この主題はくりかえし用いられ、やがて海難の文学トポスとして定型化されるほど広く流布していった。⁽¹⁾ 多少の異動はあるものの、その筋立てはおおよその次のとおりである。神は船乗りの犯した悪行に怒り、海上に激しい嵐を起こして、彼らを溺死の寸前にまで追いつめる。神の意図を察知した船乗りは、あるいは自らの罪を悔い改め、あるいは居合わせた聖人たちに神へのとりなしを懇請して、ようやく窮地を逃れることを許される。以上の概略からも明らかなように、いわば海が神の意思を体し、審判の代理人、処罰の代執行者として、罪びとに悔悛を迫る役割を果たしてい

なのだ。そして万が一にも拒否する者があれば、溺死という劫罰が彼を待ち受ける。しかしそれは途方もなく過酷な刑罰であったといわねばならない。

周知のとおり、旧約聖書「創世記」によれば、神は世にはびこる悪を一掃しようとして、大雨を降らせて洪水を起こした。すべてが水没した地上において水死をまぬがれ得たのは、神の恩寵を授かり、選ばれて箱舟に難を逃れたノアの一族と、幾種類かの動物たちだけであったという。洪水は人間の悪行に対する神の怒りの顕現であり、その怒りにふれて溺れ死ぬ者は、神の恩寵も望めぬ最悪の死を迎えたといえる。この意味において、溺死はもつとも忌むべき死に方であった。事実、現実世界における溺死は、突然の事故からもたらされることが多い。そして、そのような突然死は、「ゆるやかに訪れる死」、「予定された死」を最良の末期とみなしていた中世社会の最も忌み嫌うところとなっていた。さらにそのうえ、屍が海に失われたともなれば事態はいっそう深刻となる。正式な葬儀も営まれず、教会の墓地に埋葬されることも期待できない海上での横死は、肉体の死というばかりではなく、魂の救済さえも危うくしかねないと考えられていたからである。死が身近な存在であり、たえず来世での魂のありように深い関心をよせていた中世人に、そしてとりわけ死と密接にかかわって暮らしていた海の民に、海上での死がどれほど強い懸念をいだかせていたかは、決して想像に難くはないところである。説話の教訓的効果を願うあまりに、ともすれば誇張して物語られたであろう海難の逸話をとおして、海に対する畏怖の感情は否が応にも高められ、人びとの意識に深く刻みつけられていたに違いない。

『エリデュック』において、嵐に弄ばれる船上で、ギリアドンを海中に投じるように主張してやまない船頭の言葉は、神の裁きに対する抑え難い懸念に裏付けられているのである。このような海の民の心性を正しく理解するためには、当時の船乗りたちがおかれていた特異な現実にもふれておかねばならない。それというのも、海上での罪びとの代表となり得るほどに、彼らは人々から根深い悪評を買っていたからである。洋上にあつては日々の信徒勤行をおろそかにし、

寄港地にあつては放蕩無頼の生活をくりかえす。彼らの中には、難船海賊や漂流物横領はおろか、人身売買にまで手を染める者もあったという。陸上の人々が彼らに浴びせかけた冒瀆者、姦淫者、略奪者などの悪口雑言の数々は、このような船乗りの宿弊ともいうべき欠点を糾弾してはばからない。⁽²⁾

しかし、たえず危険に身をさらし、死と向き合つて生きるが故に、そしてともすれば悪徳に身を任せて暮らすが故に、むしろ彼らの信仰はかえつて深く、また真摯なものであつたのではないだろうか。またそれ故に、船上での異変と罪業との因果を読み解き、神意を推し測ろうとする心的傾向が、ことのほか旺盛に働いていたのではないだろうか。「殿にはれっきとした奥方がおられる。/なのにその上、神に逆らい、信仰を無視して、/また正義や信義に反して /別の女を連れてこられた」⁽³⁾とエリデュックを責める船頭の言葉は、たとえ妻と恋人とのあいだで葛藤するエリデュックの苦悩を割り引いたとしても、あながち道理なしとはいえない。

* * *

船頭の発した非難の言葉を転機として、物語は意外な展開を見せる。あらすじの続きを追ってみたい。

王女ギリアドンは船酔いに苦しんでいたが、船頭の言葉からエリデュックに妻があることを知ると、強い衝撃を受けて意識を失ってしまう。身動きもせず倒れ臥すギリアドンを見て、彼女が死んだと誤解したエリデュックは、權を手にとると怒りに任せて船頭を殴りつけ、海中に放り込む。船頭の身体はたちまちにして波に吞まれてしまった。このようにして船頭を失つた以上、エリデュック自身が舵を取らなければならない。彼らは懸命に漕ぎ、うまく舵を取つたので、船は無事に陸地に到着するところとなつた。エリデュック

は依然として仮死状態にあるギリアドンを抱いて上陸し、悲嘆に暮れながらも、彼女のために、身分にふさわしい葬儀を行い、聖なる墓地に埋葬したいと切望する。しかしことは隠密裏に運ばねばならず、彼はその手立てに思い悩むのであった。

あたかも峻厳な説教師でもあるかのように、船頭は教会倫理を盾にエリデュックの不徳を難詰する。その船頭をエリデュックは海に投げ入れてしまった。エリデュックが妻帯者であることを曝露して、ギリアドンを死に導いたと信じて疑わなかったからである。この両者の確執の構図から見るかぎり、エリデュックの行動は、神の審判に対する真っ向からの挑戦のようにも受けとれる。しかし、果たしてそうであろうか。短絡的に、教会的モラルと恋人たちの愛の原理との対立が、この情景を構築する主軸に据えられている、と言い切つてよいのだろうか。いったい中世の聴衆たちはこの部分をどのように読み解いたのだろうか。あまりに教条的なキリスト教的倫理に対する愛の力の抵抗を、そこに見ていたのだろうか。そしてその背徳性さえも、ブルターニュという遠い異郷の出来事として受容したのであろうか。だが、遠い異郷の物語ということわり書きのもとに、作者マリーが語るのは、やはり彼女自身の内実であることは疑い得ない。

もう一度エリデュックをきびしく追求する船頭の言葉を見ておきたい。「殿にはれっきとした奥方がおられる。/ なのにその上、神に逆らい、信仰を無視して、/ また正義や信義に反して / 別の女を連れてこられた」とする船頭の批判の矛先は、すべてエリデュックに向けられたものである。ギリアドンについてはなにひとつ言及されていない。そもそも妻帯者であることを知らずに、エリデュックを愛してしまったギリアドンには、非難されるいわれがないのだ。したがってこのエリデュックへの非難と、だから「われわれにその女を海へほうり込ませて下され」⁽⁴⁾ という主張とのあいだには、明らかに論理の捩れがある。それにもかかわらず、船頭がギリアドンを厄災払いの犠牲者にしようとする

るのは、中世社会、とくにキリスト教会が抱きつづけた女性に対する悪意の反映であろうし、さらに船上での女性蔑視の風潮が顔をのぞかせているのであろう。おそらく現実には、このような不当な理由から、多くの女性が悲惨な運命を強いられていたのかも知れない。

この船頭の理不尽な要求を端緒として、作者マリーは実に精妙な筋立てを展開していく。罪業に対する神の審判という主題を逆手にとって、道ならぬ恋におちいった恋人たちとその糾弾者を、自らの創作意図に沿ったかたちで断罪する。まず船頭は、誠実な愛を生きようとするギリアドンを、不条理にも殺そうとした咎で海に沈められる。エリデュックもまた、妻に対する裏切りと、妻の存在を恋人に明かさなかつた不誠実な態度によって罰せられる。ギリアドンの死（実は仮死であったのだが）に直面した彼を襲う悲嘆と懊悩は、何よりも耐え難い懲罰といえる。ギリアドンもまた罪をまぬがれ得ない。エリデュックを愛したことによって、心ならずもその妻に多大な悲しみを与える結果になるからである。マリーは彼女を限りなく死に近い昏睡状態に追いやってしまった。

このように、うわべは神による罪障審判と処罰という常套的な筋立てを踏襲しながら、マリーは罪科の判定基準をキリスト教的モラルのそれから、愛のモラルのそれへと移し変えたのだ。妻と恋人の双方を愛したエリデュックは、両者のいずれに対しても不実であったために、盲目的にエリデュックを愛したギリアドンは、妻ギルデリュエックが夫に寄せる愛を深く傷つけたために、それぞれ罪を負う。そして船頭がエリデュックから報復を受けるのは、エリデュックの背徳的行為を難じたためではなく、愛を宿命ととらえ、それを許容する心をもたなかつたためなのだ。まさしくそれは愛の名のもとでの処断であったと言ってもさしつかえないであろう。

このように考えていくと、船頭の死はある種の象徴性を帯びて見える。エリデュック一行が嵐の海から逃れるためには、船と海を知悉した船頭の存在を欠かすことができないはずであった。⁽⁵⁾ しかも状況は、船頭が「もうどうすることも出来ぬ。」⁽⁶⁾と絶望の嘆きをもらすほどに悪化していた。しかし彼らが陸

地に到着できたのは、不可思議にも、頼みとする船頭が消え去った後のことである。まさしく奇跡的に、と言わざるを得ないこの生還がかなうのは、ギリアドンが仮死状態となり、船頭が波間に沈み、エリデュックが深い悲嘆を味わった後、すなわち愛という基準に照らしての処罰が下された後のことであった。マリーは、船頭の死という出来事によって、この情景を支配する審判の基準の変更を象徴的に示しているのである。

このように見ると、マリーの意図がおぼろげながら浮かび上がってくる。教会教義やキリスト教的倫理が支配する海難のトポスの中に、女性原理を導き入れ、ごくささやかな範囲でのパラダイムの転換をはかること。これがマリーのねらいではなかったのだろうか。

* * *

神による審判という裁定システムの中に、愛という新たな価値基準を導入し、神への信仰と世俗の愛を綯い合わせた世界を描きあげて、人びとの意識変革を迫る。仮にこれがマリーの意図したところであったとして、海難の物語を苛敏誅求なモラルの実例として聴きなじんできた中世人に、この新規な主題は受け入れられたのであろうか。

この問いかけについて考える糸口は、エリデュックたちが神の加護を求めて唱える祈りの言葉の中にあるように思われてならない。その言葉に耳を傾けてみよう。

| | |
|----------------------------------|--------------------|
| Deu recleiment devetement, | 皆は熱心に神に、 |
| Seint Nicholas e Seint Clement | 聖ニコラに、聖クレマンに祈りを捧げ、 |
| E ma dame Seinte Marie | 御子が救いの手を差し伸べて |
| Que vers sun fiz lur querge aïe, | 生命をお守り下さり、 |
| Ke il les garisse de perir | 一同が港に辿り着けるよう |

Et al hafne puissent venir.

聖母マリアにも祈り願うのでした。⁽⁷⁾

神はいうまでもなく、聖ニコラも、聖クレマンも海上交通の守護聖人として古来より崇拝されていた。しかし聖母マリアについては事情が異なる。一般に聖母マリア信仰は11世紀に流行の兆しを見せはじめるが、人間と神との間をとりなす仲介者としての役割が喧伝されるのは、12世紀の聖ベルナルによる説話に負うところが大きいとされる。海の世界でも事情は同じで、マリアの功德が顕彰されるようになるのは、カンタベリーのアウグスティヌス大修道院長であったエルシヌスの功績によると伝えられる。⁽⁸⁾その後、海の救い主である聖母マリアへの信仰は13世紀にかけて急激な広がりを見せていくのだが、それは聖母マリアが、その名の由来から、海の星、すなわち船乗りを導く明けの明星・北極星と考えられていたことに起因する。しかしそれにもまして、神の苛烈な怒りをとりなす慈愛にあふれた母性的性格によって、聖母マリアは海の民から絶大な讃仰を得ていたのである。このことは、絶体絶命の危地を脱した船乗りたちが、その加護を感謝して教会に奉納した船の模型や絵画、いわゆるエクス・ヴォトトなどからも明らかである。⁽⁹⁾現存するエクス・ヴォトトの絵画には、今まさに嵐の海に呑み込まれようとする船を、天上から見つめる聖母マリアがしばしば描かれているからである。多くの場合はその膝に幼子イエスを抱きかかえ、また時には成長したイエスの前に跪き、罪びとたちの宥免を懇願する聖母の絵姿からは、慈愛と謙譲の姿勢がありありと読み取れる。⁽¹⁰⁾「現実の女性がマリアをモデルとするようになることさえ否定されなかった」という指摘にあるように⁽¹¹⁾、世俗の女性の中にも、そのような聖母マリアの徳性を、みずからの生き方の理想とする風潮が広がりつつあったのであろう。

エリデュックたち一同が唱える聖母マリアへの祈願は、人びとがそのような精神風土の中に生きていたことを教えてくれる。信仰と世俗の愛との習合、神の恩寵と愛の宿命の調和というマリーの主題は、その現実を背景にしてひとつの結論を導きだそうとする。物語終章のあらすじをさらに追ってみよう。

エリデュックがギリアドンの葬儀を依頼しようと考えていた隠者は、すでに他界していた。やむなくエリデュックは、立派な聖堂を建立して彼女を埋葬するまでのあいだ、森の奥の礼拝堂に彼女を安置することにした。一方、憂いに沈む夫エリデュックの様子に不審を抱いた奥方のギルデリュエックは、家臣に命じて夫のあとを尾行させ、礼拝堂のギリアドンを見つけ出す。奥方は即座に夫とギリアドンの関係を見抜くが、若くして命を落としたその美しい娘の死を悼んで、涙を流さずにはいられなかった。そのとき偶然に、一匹のいたちが啜る花に蘇生の効能があること知った奥方は、その花をギリアドンの口にさし入れる。すると彼女は意識を取り戻したのである。ギリアドンは奥方にこれまでの成りゆきを包み隠さずに話した。奥方はエリデュックの悲嘆の理由を知ると、ふたりに対する同情と共感の念にとらえられ、彼らの愛の深さを認めて、自分は身を引く決意をかためた。エリデュックはギリアドンの生存を知り、再会を手放して喜ぶ。奥方は離別を申し出て、修道院に入る。エリデュックは奥方のために領地を割いて修道院を建て、十分な施しも与えた。そしてエリデュックはギリアドンを妻に迎え、ながらく幸福な日々を送ったが、やがてみずからも修道院に入ることとし、ギリアドンを奥方が暮らす修道院に送った。その後この三者は強い信仰で結ばれ、ともに修道院で安らかな死を迎えることになる。

ギリアドンを死の淵から救い上げたのは、ほかならぬ妻ギルデリュエックであった。結果としてギルデリュエックの同情と共感、そして諦観にも似た寛容の精神が、嵐のさなかの船上でギリアドンに下された仮死という刑罰から彼女を放免することになる。また同時に、深い苦悶と絶望という牢獄に囚われていたエリデュックを解き放すことにもつながる。それはとりもなおさず、船頭

がエリデュックに投げかけた、あの非難の言葉への回答でもある。「殿にはれつきとした奥方がおられる。/ なのにその上、神に逆らい、信仰を無視して、/ また正義や信義に反して / 別の女を連れてこられた」という指弾は、エリデュックとギリアドンの愛を、夫婦間の貞潔、信仰と社会正義への背信という観点から批判したものであった。しかし本来的に束縛を好まぬ愛の本質を理解するギルドリュエックは、彼らの背徳的な愛をも寛恕し、自らをむなしくし、落飾することによって彼らの罪を贖ったのである。その行動からは明らかに、同情と寛容の精神こそが愛と信仰を矛盾なく結びつけるのだという、マリーの考え方に裏付けられたものであることは間違いない。

結び

海難は人間がその生死をかけて行動することを迫られる限界状況の一つだといえる。当然ながら脱出の努力が試みられることはいうまでもない。しかしながら運悪く、それでも絶体絶命の窮地に追い込まれたとき、中世の人びとは、神の恩寵による救済を祈願した。直面する厄災が悪行に対する神の懲罰だと考えていた彼らは、自分を裁き、他者を裁いてひたすらにその原因をさぐろうとする。思い当たる罪科があれば即座に悔悛し、もし見当たらなければ、こじつけてでもその排除に狂奔する。あらゆる事柄に神慮のしるしを見いだすことを慣わしとしていた中世においては、このような心的装置の発動は決して不自然ではなかった。そして、おそらく極度の船酔いに苦しみ、溺死の恐怖に苛まされるという状況下では、さまざまな盲信的行為がまかり通っていたことであろう。

マリー・ド・フランスは、自らの文学意図を最も劇的に表現する場として、そのような混乱状態を利用した。心ならずも背徳的な愛におちいり、本来ならば教会倫理によって指弾されるべき恋人たちを、愛の掟によって処罰し、より高次の心情によって純化し、救済して、信仰との宥和へ導こうというのが、そのねらいであった。また同時にそれは、教会的父権主義に特徴づけられていた

海難のトポスに、女性原理を導入することによって、愛についての思考形式の転換をめざそうとするものでもあった。その意図するところを最も効果的に伝えることができるのは、難破寸前の船上という、諸々の価値観が露骨に対立する極限状態をおいてほかにない、とマリーは考えたに違いない。

註釈

テキスト: Alfred Ewert, *Marie de France, Lais*, Blackwell, Oxford, 1969

なお翻訳文に関しては森本英夫先生・本田忠雄先生のマリー・ド・フランス『中世フランス恋愛譚』メルヘン文庫、の訳文を使わせていただきました。

- (1) 多くの場合、船乗りの悪行が指弾的となるのは、彼らが海に最も深くかかわる存在であったためであろうが、実際に悪事をはたらくことが多かったためでもあろう。悪事をおかした船乗りに対する神の怒りを主題とする逸話は、枚挙に暇がないが、その代表的な例をあげておく。

伝えられるところによると、ブルトン人のある水夫たちが商人たちを拿捕して金品を奪った。しかし彼らの船は嵐に流され、隠者ベルナルが暮らすジョセイ島へ漂着する。商人たちの解放するようにと説得するベルナルをあざ笑い、水夫たちは小風を利用して獲物とともに再び海上に乗り出そうとする。彼らが目的地を目前にしたまさにその時、ベルナルの祈願を聞きいれた神が突風を送って、彼らを大海原に追い立てる。嵐は吹きつり、海は荒れ狂うばかり。恐怖のあまり彼らは捕えた商人たちの解放を誓い、罪の告解を望む。ところがそこには僧侶がいない。荒天の中、ベルナルの住まう島に吹き寄せられた彼らは、隠者に対する奉仕を積み重ね、平穏な航海ができるように神へのとりなしを要請したという。

- (2) Philippe Masson, *la mort et les marins*, Editions Glénat, Grenoble, 1995, pp. 75-76

- (3) テキスト p. 148、835行～838行

Femme leale espuse avez / E sur celë autre en menez / Cuntre Deu e cuntre lei
/ Cuntre dreiture e cuntre la lei /

- (4) テキスト p.148、835行 *Lessez la nus geter en mer /*
- (5) もともと中世の航海における船頭の重要性はきわめて高い。扱いの難しい梶や帆を操るという技術的な側面以上に、暗礁や浅瀬、潮流や潮汐などその海域に関する豊富な知識が求められたからである。その重要性にかんがみ、たとえばオレロン慣習法では、船頭の水先業務の失態に対しては驚くほどのきびしい刑罰が科せられていた。
- (6) テキスト p.148、831行 ‘*Quei faimes nus? /*
- (7) テキスト p.148、821行～826行
- (8) 石井美樹子著、『聖母マリアの謎』、白水社、1988、p.110
- (9) ラテン語の決り文句 *ex-voto suscepto*、すなわち「捧げられた誓いの結果として」の縮約（小学館ロベール仏和大事典より）
- (10) François et Colette Bouillet, *EX-VOTO marins*, Editions Ouest-France, Rennes, 1996

エクス・ヴォトオとして12世紀に奉獻されたであろう絵画は、残念ながら今日に残されていない。現存するものは14世紀以降の作品だが、そこに描き出される構図や意匠、そしてそこに込められた精神は、マリーの時代とそれほど変わるところはなかったであろう。

- (11) 池上俊一著、『魔女と聖女 ヨーロッパ中世の女たち』、講談社、1997、p.109

(神戸商船大学商船学部教授)